AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:50.

壮年期にある肥大型心筋症の患者の病気による生活の変化が発達課題に与える影響

辻内 えり郁, 中島 葉月, 石黒 絵理

壮年期にある肥大型心筋症の患者の病気による生活の変化が発達課題に与える影響

キーワード：肥大型心筋症、植え込み型除細動器（implantable　cardioverter　defibrillator;ICD)、発達課題

○辻内えり郁　中島葉月　石黒絵理
旭川医科大学病院９階西ナースステーション

Ⅰ．目的

肥大型心筋症と診断された壮年期患者の疾病・治療に伴う生活の変化が発達課題に与える影響を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1. 対象：肥大型心筋症と診断され、ICD 植込み術を受け、A 病院で治療を継続している壮年期にある患者。

2. 方法：外来受診時に独自に作成したインタビューガイドに沿って半構成的面接法で 30 分～1 時間程度の面談を録音し逐語録を作成する。

3. データの収集期間：2014 年 10 月～2015 年 2 月

4. データの分析方法：逐語録から生活変化・発達課題に関する内容をコード化する。共通するコードからサブカテゴリー化し、抽象度をあげてカテゴリー化する。質的研究の経験者からスーパーバイズを受け、分析する。

Ⅲ．倫理的配慮

A 病院の倫理審査委員会の承認を得て実施し、対象者には研究目的・方法・プライバシー厳守について口頭及び書面で説明し同意を得た。

Ⅳ．結果

対象者は 30～40 代の男性 2 名。ICD 植込み後 1～7 年経過。28 のサブカテゴリー、9 のカテゴリーが抽出された。(表 1 参照)

カテゴリー	サブカテゴリー
肥大型心筋症と診断され、ICD 植込みになったことによる不安	致死的不整脈による突然死の不安
	病気そのものへの不安、心配
病気の不確かさ	どこまでできるかわからない不確かさ
	病気になったことが納得できない
	身体障がい者になったという違和感
	ICD が周知されていないことを知る
長く生きたいという思い	長く生きたいという思い
疾患管理行動をとる	生活習慣を振り返る
	疾患管理に関する反省
	しかたなく治療を続ける
	ICD をわかってもらうための努力をする
仕事への影響	ICD を植込みしたことによる離職への危機感
	働き方の変化を余儀なくされた
	自分が思っているように仕事ができない
	社会的役割を果たせない
	仕事上で特別扱いをされたくない
余暇に対する考え	好きだったことができなくなってしまった
	できる余暇活動を考える
	余暇活動の変化
家族に対する思い	妻へ負担をかけている
	妻との役割の交換
	家族との時間が増えた
子どもへの心配	子どもへの遺伝の心配
	倒れた場面を見たことによる子どものトラウマ
心の支えがある	同病者からの支え
	妻は自分の病気を受け止めてくれている
	変わらずに接してくれる仲間がいる
	医療者への相談のしやすさ

Ⅴ．考察

肥大型心筋症と診断され、ICD を植え込んだことで、【仕事への影響】、【余暇に対する考え】、【家族に対する思い】、【子どもへの心配】というカテゴリーが抽出され、発達課題に影響を与える要因となっていることが考えられる。壮年期は自分についての気づきを深め、求め歩むべき方向性を見出すことにエネルギーを投入し課題を切りぬけていく力があり[1)]、【余暇に対する考え】【家族に対する思い】ではマイナスの影響を受ける一方で、プラスの発想をすることができていた。しかし、壮年期にとって仕事は個人の自己概念にも影響を及ぼすとされている[2)]。そのため、【仕事への影響】では仕事の内容を変化させることはできているが、仕事に取り組む上での葛藤が多いと考える。

【肥大型心筋症と診断され、ICD 植込みになったことによる不安】、【病気の不確かさ】を感じているが、【長く生きたいという思い】があり【疾患管理行動をとる】ことにつながっている。今回の対象者は【病気の不確かさ】を感じているが、切迫した死への危機感に関する表出はなく、病気を持ちながらどのように生活していくのかという視点を持つことができている。

壮年期の場合は具体的な手段や方法は自ら考えることができる力があるため、具体的な手段というよりはその力を認め、意思決定を支援していく必要がある。その際、発達課題への影響を肯定的に捉え、調整していくために【心の支えがある】ということが重要になってくる。医療者が発達課題の影響を直接調整することはできないが、様々の情報を提供し、自己決定できるように周囲の調整を行うことが必要であると考える。壮年期にある患者が、病を持ちながらも発達課題とどのように向き合っているのか、仕事や家庭に対する価値観を知り、そのうえで疾患管理ができるように知識や管理方法について共に考えていくことが必要である。

引用文献

1）　系統看護学講座　専門分野Ⅱ　成人看護学１　医学書院　第 14 版　平成 26 年 1 月　8-17

2）　ナーシング・グラフィカ成人看護学①　成人看護学概論　メディカ出版　第２版　平成 26 年 1 月　30